

# 情報倫理は、「真実」を守る倫理である—真理と真実—

近藤良樹

## 1. 一致としての「真実」の基本構造

真実は、客観の諸事実のなかの肝心な真の事実、つまり客観的真実としてあるが、それは、同時に主観において把握されている主観的表象としてあるのでもある。真実と対立する「うそ」は、あくまでも主観のうちのみ存在するものだが、真実は、客観的なものでありつつ、同時にそれは、同じ主観のうちにおいて、うそに対立した表象として存在するのである。本稿では、前者、対象世界のあり方としての真実ではなく、後者、主観のうちでの真実のあり方を主として見ていきたいと思う。また、「真実」と同じように扱われる「真理」とのかかわりのなかで、後者と異なって真実は、意志・実践的な知性によって支えられているものであることも明らかにしていきたい。

ところで、真実と真理は、区別されることなく使用されることがある。基本的なところで等しいものがあるのであろう。「彼の考えは、真実だ」に同等のものとして、「彼の考えは、真理だ」「正しい」「本当だ」等といったものがあげられよう。「彼の考え」＝主観のうちその表象について、それが正しい・本当・真実・真理だといっているのだが、これらは、基本的には、その表象が、それによって立つ、元になる対象・事柄に「一致している」ということであろう。その主観のそとの対象をまえにして、これに一致した像・表象が作られるとき、この一致を「正しい」といい、「真実だ」というのである。

一番広範囲に使用される一致は、「正しい」であろう。これは、自然世界にも人間世界にも広く使われている。数学でも「正しい解答」という。この場合は、数的な世界の理念・法則・その帰結に、その解答が「一致」しているということである。人間的世界でも、「彼の行為は、正しい」というが、ここでは、「法」に「一致」している、規則にかなったものだということである。もちろん、経験的認識においても、「この新しい地図が、正しい」というように、対象世界に「一致」した主観的な表象なり、その表現について「正しい」という。

「本当」という場合は、一致していることとしての「正しい」「当たっている」を「本」でもって強めているものといえようか。正しい、正しくないということでの迷い・選択があるようなところで、一方をすてて、もう一つの方をとるというようなときに、「こっちが正しい、本当だ」というのである。ただし、実践的世界での「法」への一致としての正しさについては、「彼の行為は、本当だ」というよりは、「法」へのまちがいない一致としては、「彼の行為は、正当だ」と「正当」を使う。「正当」は、「不当」「不正」という、法にそむき逆らうようなことと対比して、法にはふれていないという消極的なものになる。「正義」は、正しい法(義)としては、自然法・理想としての法に一致していることであり、さらに、利害にかかわるような厳しい場面での、適法、つまり義(法)

に適っていること「正しい」ことであり、差別なく等しく一致して扱うことを根本とする。これに対して、その社会的行為が高度に倫理的で理想的なものであるとしたら、「正当」とはいわないであろう。「正しい」と一般的にいうか、「本当」の方を使うのではないか。独裁的な国家のもとでは、「正義」は、これをつらぬくことが困難だから、高く、理想的なものとなる。しかし、ふつうの社会では、法の遵守は当り前のもので、法(義)にかなうこととしての正義は、理想的なものであるよりは、最低限の規範であり、高いものとは見なされない。こういうところでは、倫理的なより高いものは、「正義」にとどまるのではなく、彼のやり方は、「正しい」「本当だ」ということになるだろうか。

さて、真理と真実は、「正しい」「本当」を一層限定したところでいう。「真」がついたものとして、主観に捉えられている諸々の正しいこと・本当のことを一層限定して、「まことに、これこそが」ということになるのである。つまり、一連の諸事実のうちで、全体を総括するような肝心要めのものが、真なる事実としての真実であり、真なる理法としての真理であるということになるのである。「彼の言っていることは、本当だ」と「彼の言っていることは、真実だ」のちがいは、「本当」では、その主張がまちがいになく諸事実に一致しているというのであるが、「真実」では、あるいは「真理」もそうだろうが、それは、まちがいないものであるのみか諸事実にとっての肝心要めをなすものであることを指し示すのではないか。

## 2. 真実は意志の問題

「真実を暴露する」というが、「真理を暴露する」とはいわない。「真理」が暴露されないのは、それが、恣意的に隠したりだましたりするような世界のことからではないからであろう。恣意的に隠されることがないから、恣意的に暴露することもないのである。これに対して、真実は、「暴露される」ということであれば、恣意的に隠されるような世界に属するものだということである。

真実には、うそ・デマなどが対立する。真理には、間違い・誤りが対応する。真理に反対の単なる誤りは、恣意的なものではない。一般的には、うっかりと「間違う」ものであって、故意にするものではない。真理とこれに対応する間違い・誤りは、自由意志において採用したり避けたりできるものではない。それは、ひとの自由意志を超えたものであり、倫理的な世界のものではない。

だが、真実とうそは、ひとの自由の領域に属するものとして、故意に、恣意的にこれを取り扱うことができる。真実があっても、これを隠してみたり、さらには、うそをいついて真実をいつわることになる。逆に、そういうことだから、「真実をあえて暴露する」というようなことにもなる。うそにせよ、真実にせよ、隠したりあばいたりという、ひとの(自由)意志が根底に働いているのであり、したがって、善悪において価値評価できるものとなる。われわれのことばとしての「真実」と「真理」の区別には、そういう実践的な自由意志の世界に属するものと、それを超越した世界のものとの区別があるとい

ってよいのではなからうか。

ところで、英語でもドイツ語でも、真理と真実は、おなじ一つの言葉(「truth」とか「Wahrheit」)で表わされる。真実と真理とを区別しない。たとえば、ヘーゲル『法哲学』は、われわれのいう「真理」についてはもちろんだが、裁判・法廷での真偽の問題にふれても、つまりは、われわれなら当然、真理ではなく、「真実」か否かがいわれるようなところでも、同じく Wahrheit を使用している(Vgl. G. W. F. Hegel ; Grundlinien der Philosophie des Rechts. 1821. § 227)。カントも同じように、真理はもちろん Wahrheit といい、さらに、周知の「虚言論文」(I. Kant ; Ueber ein vermeintes Recht aus Menschenliebe zu luegen. 1797)をみると、殺人鬼に対しても「うそ」はいけない常に「真実」を語るべきだと叙述するところにも、Wahrheit を使っている。なお、カントは、「虚言論文」では、ドイツ語では真実の意味もある「Wahrhaftigkeit」を使用もしている。ただし、文脈からみて、「真実」とも「正直」とも「誠実」とも訳せそうな感じの言葉としてである。

これに対して、N. ハルトマン『倫理学』(初版 1925 年)は、Wahrheit と Wahrhaftigkeit をならべて取り上げて、両者は似ているが、後者のみが、人間の自由意志の世界に属するもの、つまり、倫理的に価値評価される世界のものになると主張している。それらの定義・概念規定としては、Zuverlaessigkeit(誠実・信頼するに足ること)を加えて、この三つの概念を、いずれも「一致」というあり様から捉えて、対象・考え(表象)・行為に各々かかわったものとして、つぎのようなかたちに規定している。「存在する事柄と考え(確信)との客観的な一致」が「Wahrheit(真理)」であり、「考え(確信)と発言との一致」が「Wahrhaftigkeit(真実)」になり、両者は、全然別ものなのだとする(Nicolai Hartmann; Ethik. 1962. S. 460f.)。さらに、誠実さ(Zuverlaessigkeit)と、真実(Wahrhaftigkeit)を対比しては、後者、真実は、「言葉でもって、(自身の理解しているものである)所与の事実に対して責任をもつ」もので、前者は、行為と言葉の一致であり、「行為をもって、所与の言葉に対して責任をもつ」ものになるのだと規定している(ibid. S. 464f.)。Wahrhaftigkeit(真実)についての規定は、二箇所とも、「言葉」「発言」に、それのもとになる自分の思い・心にある事実が一致していることとしている。

ハルトマンのもとでは、われわれ日本語のように真理と真実が区別されているとみなしえなくもない。とはいえ、日本語のそれらとはかなりずれている感じであって、かれのいう「Wahrheit(真理)」は、われわれの「正しさ」の規定に近く、その「Wahrhaftigkeit(真実)」は、われわれのことばでは、「正直」や「素直」あるいは「誠実」の規定になるというべきであろう。正直なひとは、たしかに、心に有る事実をかくすことなく、そのままに表出する、心と発言の一致した人である。しかし、真実の人は、かならずしも、そうはしない。素直とか正直ということと等しくはない。素直・正直は、こどもにも求められる徳であるが、真実は、おとなの徳目であろう。真実は、こころにあるものをそのままに、無反省に表現するような「正直」とは異なる。「真実」には、

肝心なものを洞察する知力が求められ、かつ全体的な配慮やしっかりした意志が必要なように、筆者には思われる。

### 3. 真実一路・真実のひと

「真実のひと」は、真実の徳目を大切に生きていくひとである。真実に一途、真実一路なのである。社会のなかで、ひとは、情報を交換し、約束をとりかわして生活している。このとき、うそをつけば、自己の利益になり、ごまかせば、自分の不利益をふせげるといふようなことがある。こういう場面にであうと、ひとは、うそをついたり、ごまかしたりすることに誘われるわけだが、この時、真実のひとは、反真実のそういう行為に出る事を拒否し、自身のもうけのチャンスであったとしても、損害が出ようとも、うそやごまかしをしない強い意志をもちつづけるのである。

困難な問題があると見ると、ひとは、対応すべき事柄を無視しこれから逃避して済ませようとすることがある。知らぬ顔をしたり、あえて無知にとどまろうともする。だが、真実のひとは、こういうとき、にげたり、かくれたりしないで、真相を事実をしっかり見つめ、真実の姿をあるがままに受け取り、あるべき真実の行為・態度をとっていきこうという高邁な心構えをもつのである。

ところで、ハルトマンの「Wahrhaftigkeit(真実)」の規定は、先にのべたように、われわれ日本語のいう「正直」の規定に近いといつてよいように思われるが、「真実のひと」は、「正直者」と、どういう関係にあるのであろうか。『イソップ』に由来するといわれている話に、正直者のきこりの話があった。池に斧を落として困っていた木こりの前にヘルメス神があらわれて、金や銀の斧を手にして「これは、お前のか」という。それに対して、木こりは、「違います、わたしのは、ただの鉄の斧で」と答えたところ、「正直者よ」とほめられ、金の斧や銀の斧ももらうという話だった。

この木こりは、「正直者」だが、「真実のひと」とはいえないであろう。真実のひとならば、金の斧などで木は切れないことを思い、なぜ、神は、こんな馬鹿げたことをためすのだらうと懷疑しただらうし、金の斧をあげようといつても、正直者とちがって、もらう正当な理由がなければ、それをうけとらないかもしれない。もっとラディカルには、ヘルメス神そのものを懷疑し「おれは幻覚を見ているのか」「誰かのいたずらか・・・」と警戒し眼をこらすことになる。真実のひとは、主体的であり、反省する人・洞察する人である。正直なひとは、こころの内と外とを無媒介・直接に結んでしまう、素朴で汚れのない、どちらかというとな反省・無思慮のひとであろう。

正直の徳は、無垢な子供にふさわしい徳である。心のうちとそとの別、内緒ごとと公言してよいこと等のちがいをわきまえず、しっかりとした洞察力・想像力をふまえていない、いまだ素朴な状態にあるものの、あるいは、そういうことの求められる立場とか場面に出くわしたときの徳であろう。真実は、これに対して、内外を見きわめ、洞察し、全体をみわたし事実と真実を区別できる、主体的な大人にふさわしい徳になるのではな

いか。庭の大切な木を切ってしまったワシントン少年は、正直の徳を守ってほめられた。だが、かれは、まだ真実のひとだとはいわれないであろう。ただし、その正直は、その延長線上に、大人になっては、真実を守るひとになるのである。うそがつけない端的に素朴な正直な者から、うそもつけるものへと賢くなり、さらに、これを非常事態以外では拒否して、うそへの誘惑があろうとも、これをしっかりとした意志でもって抑えて、身に危険があり不利益になろうとも、真実を追求していくという姿勢をもつ、賢明で勇気をもった、純粹で高邁なひとへと進むとき、ひとは、真実のひと、真実一路のひとと評価されることになるのであろう。

うそがない点では、正直も真実も同じである。ただし、このうそのなさは、正直では、うそをつけない素朴さであるか、そうでなければ、うそはつけるが、これを悪ところろえ、こころにあることを隠したりしてはいけないと思ひ、うちにあるものをそっくりそのままに発言していくものになる。真実では、単にこころにあてられているものをそのままに正直に提出するのではなく、洞察力・想像力に富んでいて、諸事実のうち、それを真に示す肝心なものとしての真実と、真実をいつわる仮象の事実を区別していき、さらには、これを表明すべき場所、逆に沈黙すべき場面等についても反省を加えながら、英知を動員して、真実を提示していくものになる。正直なひとは、おそらく、そとからの強烈な弾圧・妨害を前にすると(丁度こどもがそうであるように、うそを言えと脅迫されたり巧みにごまかされて誘導されたりすると)、単純なその精神は、簡単に折れてしまって、うそをついてしまうのではないか。これに対して、真実のひとは、内外の圧力・脅迫に屈しない意志のひとで、うそを拒否し、あるいは、状況の真実を見きわめ沈黙したり、真実の暴露を決意できるひとなのであろう。たよりになる人は、単なる正直者ではなく、主体的で洞察力に富んだ真実のひとである。

#### 4. 強く意志したものとしての真実

真実は、意志の関与する領域になるのだが、では、どのように意志するのであろうか。真実は、所与の諸事実のうちに含まれているとしても、その所与のままでは、混沌としていてあいまいである。真実に向けられる意志は、まずは、知的な情熱をそこに傾けるのであり、現象の内奥に隠れている本質を取り出す分析力・洞察力として働き、あるいは、見えないものを見えるものとする想像力として働く。さらには、先入見・偏見・独断・既存の知への固執をいましめ、進取の気にとみ、常に謙虚に耳をかたむけ、知的営為への意欲をもちつづけるのである。

知的な怠惰は、無知にとどまることに、独断・盲信・蒙昧の状態に平気である。しかし、真実への意志は、この怠惰をいましめる。ひとが知・情報によって生きていく存在であるかぎり、その知・情報が欠如したり、盲信して誤りに気づかなかつたりしたのでは、的確に判断してひととして主体的に生きていくことはできない。知的怠惰をいましめて、事実を渉獵し、肝心の真実を把握し、適切な判断をしていけるようにと、真実

のひとは、自らの意志をふるいたたせるのである。

このことでは、真理であれ真実であれ、ひとの姿勢に違いはない。真理も真実も、その対象にとっての肝心要めの本質的なものを指し、それを捉えている知識内容からなるのである。ひとの知性は、それを能動的に洞察していくのである。知的な意欲・意志については、いずれもこれが必要なのであるが、真理と違って真実では、さらに、内容が多くの場合人間世界のものとなって、善悪にかかわり、したがって、その解明・表現には、多方面にわたる一層の強い意志力がもとめられることである。真実は、ひとの利害からして隠されるものになりがちで、単なる真理とちがって、これの解明には妨害があり、うそ等への誘惑がある。これらを強い意志力によって排除し克服しながら、真実は追求されるのである。

真理は、万人が受け入れるものだが、真実は、そのままでは、万人の受け入れるものとはならず、また真理とちがって、しばしば、隠蔽されることにもなる。真実は、守られねばならないのである。ガリレオが、太陽ではなく地球の方が動いていると地動説を主張したとき、それは、そのままであれば、真理を述べたということになるのであろう。だが、教会の弾圧によってその真理の表明は妨害された。このとき、ガリレオにおいて、その真理は、真実としての意味をもつことになったといつてよいのではないか。真実の世界は、自然の世界であるよりは、人間的な世界になる。うそ・いつわりでもって隠したり、これを暴いたりするその内容は、人間的な世界のことであるのがふつうであろう。しかし、自然世界のことであっても、意志してあばき、あるいは、うそでもっていつわられるような場合は、その真理は、同時に真実といわれるものになるのである。

真理の人のとじこもる象牙の塔に、真実のひとは、とじこもらない。隠されているものに対しては、真実への意志は、これを果敢にあばき出していくことになる。その暴露に対して脅迫・弾圧があるとしたら、これに対して屈服することなく、真実のために命をかけるというような勇気をもった姿勢をつらぬくものとなろう。かつては新聞をつくるものは「真実」のために命がけであった(いまでも時にそういうことがある)。弾圧・脅迫に対して、真実を守る断固とした意志をもったのであり、真実に生きることに誇りをもっていたのである。こういうときに主張され提供される情報・知は、真理ではなく、真実といわれるであろう。真実は、強い意志なくしては、貫けないものなのである。単なる真理は、だれでもが表明できる。だが、真実は、勇気のあるものでなくては口にすることができない場合があるのである。

真実への意志は、また、それに対立する反真実・うそに対してはこれをきびしく排除するものである。うそ・デマがあるところでは、これを果敢に批判していく姿勢をもつことになる。真実を隠しこれを糊塗してごまかし、さらには、うそをつくことは、単なる反真理の誤謬とちがって、邪悪な意志からなされるものであり、真実への意志は、この悪を唾棄し、これを拒絶しその悪を暴露し糾弾していくものとなろう。

当然のことながら、真実の解明が自分には不利益になるような場面でも、真実のひと

は、この解明を妨害することを肯じることはない。ましてや、真実を隠蔽するために、うそをつくことなど、その良心は決して許さないことであろう。反真実が自分の利益になるとなれば、真実の隠蔽へとさそわれる。その誘惑は、その利害の大きさに比例して、大きくなる。役に立たない「金のおの」ではなく、「黄金の山」ともなれば、うそをつけばそれが自分のものになるのだとしたら、日頃は正直な者でも、ここに誘惑の声がささやき、そうしたくなることであろう。だが、真実への強い意志をもつひとは、そういう誘惑のまよいを持つとしても、これを抑制して、うそを良心のたえがたい恥じとして、真実を守る決意をあらたにするのである。

## 5. 媒介知ゆえの誤り・偽り

真理も真実も、直接的所与としての諸事実をふまえながらも、この直接的なものの根底・背後に本質的なものを見い出していこうとするものとして、この直接的なものを離れることになる。それは、その内面に根底に入り込んでいくつもりでも、単にその諸事実の現実から離れて、虚妄の世界にとまよいこんでいることでしかない場合もありうる。つまり、真理のつもりだが、単なる誤謬・間違いとなっていたり、真実ではなく、虚偽・うそでしかないということにもなる。

ただし、真理・誤謬の世界は、真実・うその世界と異なって、いずれも真理追求のなかにあり、誤謬に価値をみとめることはない。誤謬は、故意に求められるものではない。誤謬・間違いの形成過程においても、真理追求のつもりであって、間違いをつくり出そうとしているものではない。間違いの形成は、いうなら、それについては、無意識・無自覚にとどまっているのであって、仮にそれを間違いと意識できたときには、その間違いを訂正し、真理の追求に方向をあらためていくことに躊躇しない。

だが、真実・うその展開は、そうではない。うそは、通常、無自覚に展開されるのではなく、意識的に故意にそうされるのである。うそと十分に自覚しつつ、これを相手に受け入れさせるために、真実の装いをし、真実味を出すために種々画策するのが、うそつきのあり方になる。

真理の追求では、誤謬にはなんら価値は認められない。逆に真理は、これに比しては、絶対的な価値であり、万人の承認するところのものとなるのが一般的であろう。だが、真実は、それが人間的な利害のからむ実践世界の事柄として、故意に隠され偽られるものとして、単純ではない。利害の対立しているところでは、一方の真実は、他方にとっては、好ましくない事柄として、うそ・偽りとみなされがちである。一方から見ると、うそ・虚妄であるものが、他方にとっては、崇高な真実となることもある。真理は万人のものであれば、ことさらに隠されることはないが、真実は、しばしば隠される。戦争のような敵対状況においては、敵をあざむき、真実を徹底的に隠す作戦がとられる。したがって、また、真実は、隠されているものをあばき立て、さぐりだしていくものとなるのである。

真実とうその世界は、実践的な世界として、故意にうそをついたり、強く意志して真実を追求していく倫理的・反倫理的な世界となる。真実を隠すことは、通常は、否定的なこととみなされる。しかし、かならずしも否定的なだけのものではない。その真実を知ることによって、ひとが不幸になるだけなのであれば、それは、隠されている方がよいのである。この時、真実を語るのは、邪悪な意志のもとでのこととなろう。他方、ふつうには反倫理的なうそも、肯定的な価値になる場合がある。暴力団員が善良な市民を追いかけていて、「どっちに逃げた」と聞かれて真実をもらすものは、非難されるであろうが(カント(「虚言論文」)のようにこういう場合でも「うそはいけない、真実を語れ」という極端な真実至上主義のひともあるが)、逆方向を示してうそをつくことは称賛される事柄であろう。あるいは、戦争で敵に拷問されて、真実をもらして味方に大損害を与えたものは、一生、良心の呵責に悩まされることであろうが、うそをついて敵をかく乱できたものは、勲章ものと評価されることであろう。

「真理」の「間違い」とちがって、「真実」の反対である「うそ」・「虚偽」は、本来的に自身の意志によって、故意に作られ語られるものであり、その意志が善意からなるものであれば、そのことは、しばしば自身において肯定的に評価されることになる。だが、それでも、「うそをつく」ということでは、それが善意に発するものであったとしても、ひとは、若干は後ろめたいものを感じる。うそをうそと知っているのであれば、相手は、これにだまされることはない。相手が自分のうそを真実と信じているとき、うそは、生きるのである。つまり、うそが活着しているかぎり、相手は自分を信用しているということである。信じてもらっているということである。それを裏切る、裏切っていた、だましていたということになるのだから、相手に対して負い目を感じてしまうのである。のちに、うそとわかったとき、その相手は、好意をもち信じていたのに「だまされた、やられた」と、うそをついた人に対して否定的な感情をもつことが想定されるのである。

信用・信頼を裏切るという行為は、人間関係の根本をゆるがすことであって、あとでそれが善意の裏切りであったと十分に納得されるのでないかぎり、不信を招いてしまう。その信用をなくする行為を、うそ・虚偽は、善意からするものであっても、しているのである。これは、敵対関係にあった場合にも、同様のことである。敵であっても、関係を成立させるためには信用するということがあり、うそが生きるには、真実と信じるものがあつてのことになるから、うそをつくことは、信用を失わせることになって、気持ちを重くすることになるのである。

真実のひとというのは、真実を大切に、うそをつかないひとだが、これを自己目的にした視野のせまい人間であつてはならないであろう。ときに、真実がひとをきずつけ、うそが人を救うということが浮き世の真実となる。「真実」「うそ」を大きな価値・反価値と評価している真実のひとは、同時に、それらがどういう場面でどういう価値をもつかということの真実をも知っているのではなくてはならない。ささいなうそ、方便として

のうそと、大きな真実、ささいな真実等の区別と優先すべき順序も周知しているのでなくてはならない。そういう真実のひとは、おそらくは、ささいなうそが大きな真実を生かすのであれば、うそをつくことも真実擁護の一環と位置付けて、うそをつくことができるのではなかろうか。

正義のひと、愛のひとでも同様だが、それらにかたくなな融通のきかない者は大きな正義を見のがし、大きな愛を見失うように、真実というものに頑な、自己満足に重きを置く自称の「真実のひと」は、ささいなうそを許さずこれに執着し、秘密にすべきプライバシーにかかわる真実をかたって、周囲を困らせるのであろう。これに対して、広く世界を見渡して全体に関する真実を把握しようとして、多様な真実の有り様をその限界をもふくめて周知している、柔軟な真実のひとは、時と場合によって、真実を隠したり、うそをも語りうるような融通性をもった存在であるべきではなかろうか。だが、かりにうそによって、ひとが助かるとしても、自分のうそが信じられたということである。彼は、信用されているのに、それを裏切っていることを十分意識しているであろうから、平気でうそをいうことができるはずはなく、こころを痛めつつそうすることになるであろう。

## 6. 否定の否定

真実は、うそ・デマで偽られ隠されている否定的なものをふまえて、この否定的なものを否定し暴露していくものとして、否定する働き、「否定の否定」の運動のなかに存立していくものと見なすことができる。

ハイデッガーは、真理・真実のギリシア語 *aletheia* に、*Verborgenheit* (非隠蔽性)、隠蔽から暴き出す意味を見い出しているが (Vgl. M. Heidegger; *Sein und Zeit*. 12te Auflage. 1972. S. 33)、真理・真実は、そういう否定的な働きから捉えることができる。*a-letheia* は、*letheh* を否定辞 *a* で否定したものである。*letheh* とは、忘却であり、不注意というような意味をもっている。真理は、不注意の、いわば無知の状態を前提にし、これを否定・克服していくところになるということである。あるいは、なんらかの形で、生得観念があると考えるのなら、それをこの世においては、なお忘却したままなので、そういう否定的な状態から眼をさまして、この忘却を否定・克服したものと、真理が成立するということになる。真実もこれらのことは同様であろう。

これらの忘却・無知は、人間的な意志・恣意によって作られたものではなく、いわば自然的なものとして前提される、否定的原初状態である。だが、これが恣意的になされる場合がある。ひとによる隠蔽である。この場合は、その隠蔽という積極的な否定的状態をふまえて、それを拒否し、強い意志をもって、妨害を排しながら、本当のところを解明・暴露していくことが必要となる。真理は、特殊な場合以外、強いて隠すことはないであろう。しかし、ひとの世界の真実は、隠されることがしばしばとなる。したがって、それは、強引に暴くという姿勢を必要とすることになるのである。真実に関しては、

その原初状態において、単にその認識主体の方の忘却・無知(ゼロ状態)があるのみではなく、人間世界の方に、積極的に認識をさまたげようとする、隠蔽というマイナスの否定的なものが存在していることがあるのである。この原初の否定を強い意志でもって否定し、真実を暴露していくことが、否定の否定で根源の真実へと帰っていくことが、真実に固有の運動として存在しているということができる。

こうして成立した真理や真実には、その反対のもの、否定的な誤謬や虚偽が並び立つことになる。真理に対立する誤謬・誤り・間違いは、対象世界の本質に一致していない表象として、無価値なものとして放棄されるのみである。これら誤謬は、真理の前に無でしかなく、それ自体は、自らを肯定的積極的なものとして自己主張することはない。誤りは、誤りと分かったときをもって、ただちに志向対象となること、目指されることを止める。おとなしく引き下がり、消え去るのみである。

しかし、真実に対立する虚偽・うそは、単なる無にとどまるものではない。うそは、自身の「うそ」である本質を周知しながら、逆に真実を自称する。したがって、間違い・誤り等とちがい、引き下がるどころか、うそは、真実をうそと非難してこれと積極的に対立して、あい争う姿勢をもつのである。注目され志向されることをやめる「誤り」とちがって、「うそ」は、人をして真実と同じものという装いのもと、うその内容を志向させ注目させつづけようとするのである。真実は、うそを排除するために、積極的にこれと対決していく意志を持続させていくことがしばしば必要となる。自己の真実であることを実証し、うそがそれに反していることを追求していくのである。うそを拒否し否定していくことに懸命とならねばならないことが真実ではすくなく求められる。

真実は、隠されているものを暴き出し、うそと戦う姿勢をもつことになるが、事柄によると、隠され、うそでもって偽られる必要がでてくることもある。本来、隠され、うそで覆われていたのは、そうする方がひとのためにはよいということがあったからかもしれないのである。ひとを不幸にするような真実は、そういうプライバシーなどは、隠されている方がよい。真実は、自己主張をやめて、もとの隠蔽にもどっていく方がよい。あるいは、積極的にはうそでもって隠蔽されるべきかもしれない。こういう真実は、自身をふたたび否定して、lethe(忘却の河)のかなたへと自己止揚し消えていくことになるのである。

## 7. 結び(わが国では真理と真実の区別は、古くからあった)

現在、われわれは、真理と真実をともに使用し、その意味は、普遍的原理的客観的な真理と、個別具体的な主体的実践的な真実というようなかたちで区別されているように、筆者には思われる。ところで、これらの言葉は、いつ頃から、使われることになったのであろうか。真実というと、浄土の真実の教えをかかげる「浄土真宗」の祖である親鸞は、主著『教行信証』の各巻を「顕浄土真实行文類」「顕浄土真実信文類」等と銘打って、「真実」という言葉をしばしば使用している。そのいわれる真実は、「虚仮諂偽にし

て真実の心無し」（『真宗聖典』 法蔵館 昭和 36 年 335 頁）というように、「虚偽詭偽」の反対、つまり、それは、仮りのもの・方便ではなく、「本当」の教えだ、虚妄・うそ・偽りではなく、へつらい飾ったり隠したりしたものでもない、まことの正しい正々堂々の教えだというものであろう。また、彼は、わずかであるが「真理」も「難信金剛の信樂は・・真理なり」（「顕浄土真実教行証文類序」 同上『真宗聖典』 265 頁）とか（同序に「撰取不捨の真言」（同上『真宗聖典』 266 頁）というのを、『教行信証』をまとめて繰り返している『浄土文類聚鈔』の同一の文章とみてよいところには）、「撰取不捨之真理」（同上『真宗聖典』 518 頁）といったりしている。真理は、まことの道理・ことわりだということであろう。真理・真実は、明治時代になってからの翻訳語などではなくて、相当に古くから使用されていた漢字のようである。

「真実」が、仏教の使用するところとなっているのは、輸入先の中国で、そうであったようで、これは、仏教の漢訳用語ではないかといわれる。例のわずか 260 字あまりの『般若心経』にも「真実不虛」と出てくるように、漢訳経典では「真実」の語は、ごく普通に見い出される。「真理」については、わが国同様、中国でもあまり多くは使われていないようであるが、辞典によると（『岩波仏教辞典』）、「真理顕わるるを名づけて天と為す」（『摩訶止観』（4 上））とか、「経は、仏性の真理を明かす」（『華嚴五教章』（1））と真理を中国仏教でもいうことはあった。

真理は、まことの本当の「理」ということであろう。理とは、気に対する理、事に対する理であり、あるいは、情理・性理というときは、情や性に対するものであった。つまり、気という物質的のものではなく、観念的な根本原理であり、事という個別具体の現象ではなく、普遍的で抽象的な理法であり、人情というものに対比される厳粛な道理であり、人の性命に対しての天の道理・理法というような意味になっていたのである。真理、真なる理とは、個別的人間的な情念の世界のかなたに超然としてある普遍的なイデアールな原理であったといえる。そして、これは、われわれが使用する真理概念と同等なものともみてよいであろう。

他方、真実の方は、真の、まことの「実」である。実そのものが「まこと」「本当」ということであって、真と実は、同じ意味のものを重複しているということになる。「実」は、仮・権・虚等に対立する。仮の方便的に許されているだけのものではなく、虚、うそ偽りではなく、本物であり、本当で、実際にあるものだということになろう。仮のもの、うそかもしれないもの、方便としてあるもの等と対立しつつ、これと並んでいるのが真実である。ひとがつくり出したり、見つけだしてならべているもののなかから選択して、これが一番だ、これが本物だと取り出したものになる。ときには、迷いながら、意志において、自覚的に選び取っているのが、真実であり、廃棄したり、放置しておかれるものが、うそや方便となるのである。真実は、選択意志を働かせ、主体的に能動的に、あるいは、場合によると、こうあるべきだ、これこそ本物だと、ひとによって創造・創作されるような実践的なものとして成立しているのである。真理は、真如と

してそこに端的に存在するもの Sein(有るもの)であるが、真実は、イデアールなもので、しばしば Sollen(有るべきもの)としてあって、対立的な他者からは、それは、真実とはみなされず、虚偽・方便としてしか承認されないものともなるのである。

われわれ日本人が今日にいたるまで、この真理と真実を区別して使用しているということは、英語やドイツ語では一つである truth(真実=真理)とか Wahrheit(真実=真理)というものに対して、これを二様に区別するようなものの見方をして世界を捉えようとしてきたということである。人間的個別的な、パトスの重視される主体的な「真実」の世界と、人間を超えた、ひとには、動かしがたく、あるがままに受容する以外ないような、自然的な普遍的で法則的な「真理」の世界との区別である。うそをつき、だまし、だまされ、かつそれを厳しく否定して真実のために戦い、それを擁護するために情熱をもやしていく「真実」の世界は、間違いと分かれば即座に訂正していけるような冷静な理知のもとでの「真理」の世界とは、根本的に異なるというのが、われわれ日本語のもとにあるものの共同していただいている世界観であり、世界への構え方になるのであろう。

The duty of information ethics is to protect truth

-SHINRI(truth in general) and SHINJITSU(practical truth)-

Yoshiki KONDO

In Japanese, we distinguish from old times the truth which is the coincidence of ideas with original important facts, between SHINRI(truth in general) and SHINJITSU(practical truth).

I think that SHINRI(SHIN=true, RI=logic) is used in natural facts with objective universal validity and generally is not refused by anyone. On the contrary we use SHINJITSU(SHIN=true, JITSU=true) in practical facts or concerning human problems and usually somebody can refuse this ethical truth.

The opposite concept against SHINJITSU(practical truth) is a lie, which is used intentionally with the knowledge of untruth. The opposite against SHINRI(truth) is an error, which we fall into accidentally against the will of us as truth searcher.

SHINJITSU(practical truth) and lie are in the practical field of human relations, so, to defend SHINJITSU, sometimes we must have strong courage. Then information ethics is the ethics which protects this SHINJITSU. The man of SHINJITSU is practically intelligent honest person. Even if he can get a gold mount by means of a deceit, he never tells a lie and preferably compels himself to protect the truth.

平成 12 年 6 月

『倫理学研究』（広島大学倫理学研究会）第 13 号 3~18 頁